

FCTメディア・リテラシー研究所所員 畠山亮太

本書は、イギリス人の著者がイギリスの大学生を対象として書いた「カルチュラル・スタディーズ」の入門書である。その意味で、本書はイギリスの社会的な背景を前提としている。しかし、訳者が述べるように、本書の意義は、私たち自身が日頃接している日本の現代文化について、少し距離をもって改めて見直し、考えてみる為の道具として、様々な概念や視点、考え方や行動の仕方が紹介されている点にある。そこで、本書の紹介として、著者が実際に記した部分ではなく、著者の分析を踏まえて日本の研究者が「カルチュラル・スタディーズと日本の文化状況」として様々な日本の現代文化を分析している章があるので、そこを取り上げてみたいと思う。

テレビ文化（瀬沼文彰）

制作者と視聴者の関係についての「支配・ヘゲモニー的位置／交渉的位置／対立的位置」の概念は、テレビ視聴が制作者の意図どおりには行われていないことを明らかにした。

1990年代半ば以降に顕著となる「対立的な位置」では、テレビに慣れ親しんだ視聴者はテレビが虚構の世界を作り出すことを熟知しているが、テレビを見限る訳でもなく、その一方で、制作者も虚構にしかなり得ないことを隠さずに、それでもリアリティのある番組を提供しようとする、複雑で微妙な関係が成立している。

ケータイ・ネット文化（勝又雄）

イギリスでは携帯電話が、個としての自律を前提とする社会参加のためのメディアとしてみなされているが、日本では、小学生までもがもつ、家族や友人間のコミュニケーションの道具となっている。また、インターネットについても、イギリスではパソコンの補助としての役割が基本であるのに対し、日本ではパソコンとは別に独自の「ケータイ・インターネット」の世界が発展している。著者のロジェクは、携帯電話やインターネットによって世界規模に拡大する公共圏の可能性の現実化を指摘しているが、日本ではむしろ逆に、身内だけの島宇宙への帰属意識と繋がり優先し、異質な他者や世界に対してかべを作る道具になる傾向となっている。

日本の大衆文化（加藤裕康）

イギリスにおける文化研究は階級による序列が強く反映されていた。つまり、その対象が支配（上流）階級に馴染みのある「文化」に限られていた。これに対し、日本の文化は高級でも大衆でもない「中間文化」と指摘された。イギリスと日本における大衆文化の違いは、戦後のアメリカ文化の移入に対しても顕著に現れる。アメリカ文化を批判的に受けとめ、独自のものを模索したイギリスと、ただ無批判に受け入れた日本。仮に、高級と低俗を一人の人間の中にある公と私の二面だと仮定するなら、日本の文化の特徴は、私的な興味を隠さずに公に共有してきたことにあるのかもしれない。

これらの他に、「日本の大衆文化研究（武田和彦）」「ゴスとゴスロリ（佐藤生実）」「オタク文化（吉田達）」「日本のニート資本主義（宮入恭平）」「日本の出版文化（三浦倫正）」が掲載されている。